

団欒を終え、明日の準備を済ませた後、ネックはひとりで夜風を浴びたくなった。

二階の窓にかかっているはしごを上り、屋根の上へ。傾斜の緩やかなお気に入りの位置に寝っ転がって、夜空を見上げた。

暗幕のような夜空に、わずかに欠けたメルキュールが浮かんでいる。高貴な白い光を放っていて、丸い輪郭がくっきりとわかる。ルインはほとんど欠けている。

不思議なのは、メルキュールという大きな衛星に負けないほど、他の星々の輝きもしっかり見えるということだ。

平時、メルキュールやルインが明るいと星は見えない。しかし今、赤や黄や緑や青の輝きたちが、夜空に宝石のかけらをばらまいたようにはっきりと見える。そのかけらたちが、息をするように小さく明滅している。

そうだ。今晚だけではない。最近、妙に星が明るい気がする。「気がする」というのは、それを確かめる術がないからだが、ネックにはどうしてもそう思えて仕方がない。

この夜空の向こうには、「宇宙」という真っ黒な無限の空間が広がっているのだと、いつか読んだ本にあった。あの星々は、その宇宙とやらに存在しているのだと。

宇宙というものがどういうものかは、わからない。

ただ――。

ただ、この夜空の向こうに、自分の想像もつかない世界があるというのは感じている。

「ノアの髪、すごく綺麗だね」

「リ、リアムの髪も、きれいだよ……」

二階の寝室の窓から、リアムとノアの声が聞こえてくる。

ふと、首に提げているチェーンをつまんで、ペンダントを見つめた。

普段は誰にも見せない、金属で固定したビー玉サイズの宝玉。

自身の瞳と同じ黄金色。

またたく星の下、ネックは思いを巡らせる。

ノアの身元を探る方法。

ノアが記憶を取り戻す「きっかけ」を作る方法。

実は――ひとつ、ある。

マーデル・プラッタであいつ(…)に訊くより、確実な方法。

そのための『魔法』が。

でも――その魔法は、使えない。

夜風が吹いた。

ネックは、むくりと起きて、寝室へ戻った。